

名古屋外国語大学海外派遣プログラム成果報告書

2022年 11月 9日

学部・学科名 世界教養学部・国際日本学科

担当教員氏名 近藤 行人

| | |
|-------------|---|
| 1. 区分 | 中期留学 ・ 語学研修 ・ 海外実習 |
| 2. プログラム名称 | ハノイ国家大学外国語大学日本語教育実習 |
| 3. 渡航先国名 | ベトナム（オンラインにて実施） |
| 4. 派遣期間 | 2022年 2月 28日（月）～ 2022年 3月 11日（金） 12日間 |
| 5. 派遣先教育機関名 | ハノイ国家大学外国語大学 |
| 6. 参加学生数 | 5名 |
| 7. 派遣目的 | ハノイ国家大学外国語大学（以下、ULIS）学生を対象として、日本語授業の見学、オンライン教壇実習を行い、あわせて、異文化体験やULIS学生との交流の機会をもつ。 |
| 8. 派遣内容 | ① 事前指導 : 教壇実習で担当する予定の教授内容につき、授業計画立案、教案作成などを行い、指導を受ける。 ② 授業見学 : ULISにおける日本語授業（オンライン）を見学する。 ③ オンライン実習 : ULIS日本語学科の授業において、各実習生あたり4回の教壇実習を行う。実習に先立ってULIS教員による教案指導を受け、実習後に批評・助言を受ける。 ④ 異文化体験 : ULIS学生との交流 ⑤ 実習報告書の作成 |

| | |
|--------|--|
| 9. 成果 | <ul style="list-style-type: none">・教育実習の実施（授業見学、授業の実施、振り返り） 「文型・表現」クラス、「読解」クラス、「会話」クラス、「作文」クラスにて各1回実習を行った。実習生は「普通の日本語授業をオンラインでする」のではなく、「オンラインだからこそできること」を考えながら実習を行った。・交流会の実施 ULIS 学生との交流会をオンラインで実施した。・報告書の完成 実習を通して学んだこと等をまとめ、報告を作成した。 |
| 10. 備考 | |

以上

教壇実習報告書

今回の実習で、私は初めて授業を組み立てるという経験をしました。そのため、どのように授業を進めればいいのかわからず不安もありましたが、様々な資料を読み、できるだけしっかりと教案を作り込むことを心がけました。しかし、実際に授業が始まると、学習者からの予想外のリアクションにうろたえてしまい、一人ひとりにきちんと対応することができませんでした。「早く授業をしてみたい」「楽しい授業をつくりたい」と意気込んでいたもの、自身の準備不足にショックを受けました。ほかにも、授業の度にさまざまな課題にぶつかりましたが、実習を終えて振り返ってみると、大変学びの多い2週間でした。

私が教案作成と教壇実習を通して、学んだことは2つあります。1つめは、指示を明確にすることの大切さです。どれだけ内容が詰まった授業でも、指示が不明確だと学習者は混乱し、自分が何をしたらいいのかわからず不安を覚えてしまいます。そのため、指示をはっきりと口に出すことと、スライドに文字として表示する必要があると考えました。私自身も、英語の授業で「今は何をやる時間？」と聞いたことも聞かれたこともあります。聞くほうはもちろん不安ですし、聞かれたほうも自分の認識が本当に合っているのか不安になり、負の連鎖が起こります。このようなことで授業の進行が滞るのを防ぐためにも、一つひとつの指示をしっかりと伝えることを意識しなければならないと思いました。

2つめは、何よりも自分自身が授業を楽しむことの大切さです。教師が楽しく教えていけば、自然と学習者も学ぶことが楽しくなってくると思います。仮にそれが難しかったとしても、声のボリュームを上げたり、テンションを維持したりすることは必須だと思いました。ぼそぼそと話す先生の授業よりも、元気にはきはきと話す先生の授業のほうが、学習者も「聞こう」と思ってくれるのではと感じました。

全体的な反省としては、もっとベトナムの先生とコミュニケーションをとるべきだったことが挙げられます。学習者のレベルや授業の進度、クラスの雰囲気

など、実習生にとっては1回きりの授業ではありますが、ベトナムの先生と学習者にはそれまでの積み重ねがあります。そのことを理解したうえで教案作成に取り組むべきでした。オンラインで全員の顔が見えないという制約がある中でも、ベトナムの先生は様々なオンラインツールを駆使して授業を展開されていました。私は日本の授業で使ったことのある padlet のみを使用しましたが、このことを知っていれば自分の授業にも使えたかもしれない、と反省しました。

今回の実習を経験して、自分の教育観と、授業でやるべきことの擦り合わせの大切さとむずかしさに気づきました。2週間という短い期間でしたが、先生方の熱心なご指導と、学習者たちの元気な反応のおかげで充実した実習となりました。そして、滅多にできない貴重な体験から、たくさんのことを学ぶことができました。この経験を忘れず、今後に活かしていきたいと思います。

教壇実習報告

今回のハノイでの日本語教育実習は、初めて自分が「教える」という立場に立つ上に、初めて実際に使う教案や教材作り、そして慣れない ZOOM での授業という、初めての連続のオンライン実習だった。まず実習を終えた率直な感想としては、大変だったが、それ以上に楽しかった。一から作る教案や教材作りなどの授業前の準備にとっても時間がかかり、心が折れそうなほどだったが、その分学生たちからたくさんの学びを得ることができた。しかし、今回の読解、文法、会話、作文 FB、計 4 回に渡る実習を振り返ると、納得のいく授業ばかりできたわけではなかった。自らの教育観とのすり合わせが上手くいかなかったり、cando 設定に沿った意味ある授業の流れ作りに苦勞したり、オンラインならではのトラブルに見舞われたりした。その中で感じたことを交えつつ、一つ一つ振り返っていこうと思う。

まず読解の授業では、初めての授業ということで焦りや緊張がとても大きかった。その上、2 回も ZOOM から落ちてしまうというトラブルがあったことで、教案通りに一切進まず、詳しい解説やグループで話し合いをしてもらおうと設けた読解内容から発展させた質問も、飛ばさざるを得なかった。肝心の循環型社会についての意見を学生たちの口から直接聞くことができなかつたことは残念ではあったが、積極的な学生たちの発言に助けられ、用意していた正誤問題や読解問題までは終えることができた。そして無事 50 分間の授業をやり遂げることができた。今思えば初めての授業でこのトラブルがあり、不完全燃焼の状態で終わったからこそ、その後の 3 回の授業はさほど緊張を感じずに学生たちに接しながら授業を進めることができたと思う。

続いて文法の授業では、読解の授業とは打って変わって学生たち全員のカメラがオフになっていたことで、学生たちの反応を見ながら授業を行うことができなかった。そのため、指名した後に学生から返答がない場合に、聞いていたけれど答えが分からずに発言をしないのか、その場にいないのかが分からず、空白の時間を私自身が話し続けてしまったという反省点が大きい。返答が無くとも学生を信じて、ヒントを与え過ぎずに、考えてもらう時間を作る余裕があれば良かったと思う。また、限られた時間の中で授業を終えなければ、という

考えから学生の発言に対して深掘することができなかった。しかし時間を見つ、練習問題を何問か飛ばしたことで、時間内に授業を終えることはできた。模擬授業とは異なり、実際の初級の学生相手だとスムーズに授業が進まなかったところもあった。しかし時間が足りなくならないようにと多く練習問題を準備し、事前に優先する練習問題を決めておいたことで、焦らずに授業進行をすることができたと思う。準備にやりすぎはないと感じた。

会話の授業では、指示出しの難しさを痛感した。穴あきの会話文を用意し、穴あき部分を好きな言葉に入れ替えてペアで文を作ってほしかったのだが、学生たちにその意図が上手く伝わらなかった。穴あき会話の PDF も用意してチャットに送ったつもりでいたのだが、実際には送ることができていなかったことと、その前に教科書を開いてと指示してしまったことで、ただ教科書の文を読み合うだけの活動になってしまったのだと思う。活動の指示を正確に伝えるためには、その前後の指示内容にも注意しなければいけなかったと気が付いた。さらに、会話の授業では Padlet を活用した授業に挑戦した。何を非常袋に入れておかなければいけないのかをグループごとに考えてもらったのだが、学生たちは積極的に意見を出してくれとても嬉しく思った。おもしろい意見もたくさん出してくれた。1 グループごと全ての意見と理由を聞きたかったのだが時間的に余裕が無く、2 グループしか意見を聞くことができなかったが、学生たち自身で見返してもらうことができるように、その後のフィードバックの際に先生に Padlet を学生たちに共有してもらうように伝えた。学生たちが Padlet を見返して、非常袋についても考えるきっかけになっていることを願う。

作文 FB の授業では、教師側が間違いを指摘ばかりするのではなく、学生たち自らが振り返ってもらうことができるように、グループワークを中心に 1 限目と 2 限目で授業を二分割にした。そして私は 2 限目を担当した。2 限目ではグループのメンバーの作文を読んでよかったところ、直した方がいいところ、感想、質問などを考え、話し合ってもらう活動を中心に授業を行った。特に、1 限目の授業で話し言葉や書き言葉に着目したので、クラスメイトの作文の中で話し言葉を見つける活動も行いたかったのだが、想定よりもまずは作文を読むことに時間がかかってしまった。今回は 3~4 人のグループに分かれてもらったのだが、ペアにして 1 人だけの作文を読んでもらえば良かったと思った。最後に話し合いを終えて、グループでどのようなアドバイスをもらったのか聞いた際にも、まだ全員分の作文を読めていないと発言してくれた学生もいたの

で、もう少し学生目線で授業作りをしなければいけないと再考することができた。授業内で時間が無ければ、事前に読んできてもらうなども一つの方法だったと思う。

計4回の実習を通して、自分の中で良くできた点も、もっと考えなければいけなかった点もある。しかし、全て教案を作る中だけでは分からずに、実際に学生たちと接しなければ分からなかったことだ。学生の予想外の返答もあった。実習を終える今だからこそ、予想外の返答に対する柔軟な対応や学生との話を盛り上げるためにも、自らの話のストックをもっとためておくべきだったとも思う。また、ブレイクアウトルームで学生たちから直接意見を聞いたことやベトナムの先生方のフィードバックからも、レベルに合った活動をする事ができていなかったと感じる場面もあった。さらに自分の中ではゆっくり話したつもりでいても、学生たちにとっては早いと感じる部分も多々あったように感じる。自らの「学生が中心となり授業を作る」という教育観とは、離れてしまった授業もある。だが、これらの反省点は経験しなければ分からなかったことで、今後経験を重ねる上での貴重な情報ともなり、さらに良い授業作りをするために必要なものだ。対面での実習は叶わなかったものの、オンライン上で学生たちと接することで、改めて学習者に寄り添った授業作りの難しさも日本語を教える楽しさも、そして自らの教育観を振り返るきっかけになったとも感じる事ができた。今回のこのオンラインで行った実習経験を忘れずに、必ず今後活かしていく。

教壇実習報告

私は、今回の実習で読解、文法、会話、作文フィードバックの4つの授業を担当した。初めての实習かつZOOMを利用した授業だったため、特に大変な面を感じる事ができた実習だった。教案作成から実際に授業を行うまで躓くことばかりで心が折れるかと思ったが、そこから学び取れたことはあった。

今回の実習を通して思い返してみると、学んだことが大きく分けて2つある。1つ目は、教案作成のうえで効果的な練習を積み重ねて最後の活動につなげることの重要さだ。特に会話の授業では、最後の活動のための練習を積み重ねることができていなかった。今教案を見返すと、非常袋についての知識を深めるだけで、最後の会話の活動に向けての練習が書かれていないのがよくわかった。その結果、自分で授業を進行してある活動から別の活動につなげる際、違和感があった。

2つ目は、授業進行のうえで学習者の状況を気遣うことの重要さだ。1回目の授業である読解では、学習者を気づかうことができなかった。1回目ということで、とても緊張していたが、自分の質問に積極的に答えてくれる学習者がいてくれたおかげで授業を進めることができた。しかし、その学習者に頼りきりになってしまい、ほかの学習者からの意見を聞くことができなかった。また、学習者の理解状況を確認するために全員に向かって「わからないところはありますか。」と質問を投げかけたときも、答える人がおらず、結局クラスのなかで日本語レベルが高い学習者が「ありません。」と答える場面があった。学習者をランダムで名指しすれば、均等にクラスの理解状況を確認することができたかもしれないと思う。

今回の実習を通し、日本語教育の基本には、自分が日本語教師になるために必要だと思っていた「学習者に対する気遣い」があるのだと強く感じた。そして、基本のことだが、実行するのは難しいことだということも分かった。これからの経験に生かしていきたい。

教壇実習報告

今回の実習は、Zoomを使用したオンライン形式の実習で、ハノイ国家大学外国語大学の1・2年生を対象とし、文法・読解・作文・会話の4つの授業を行いました。実習を行うにあたり、私自身の教育観である「学習者のモチベーションや意欲を維持し続けられる授業」を目指して、教案・教材作りに取り組みました。

読解の授業では、3つあるパラグラフを1つずつ内容を深めていく方法を取りました。また、全体的にスピード感を意識した授業を目指し、学習者をだらけさせない、飽きさせない授業を目指しました。1つのパラグラフごとに本文の黙読、内容についての選択問題、短文で答える問題、内容に関する日本文化についての説明(お葬式・銭湯など)、ベトナムと日本での文化の比較という順で進めました。学生も積極的に挙手や発言をしてくれたので、とてもテンポの良い授業だったと思いました。改善点としては、日本とベトナムの文化を比較するグループ活動の後に、学生が発表してくれたのですが、その時にもっとその発言について深掘りしたり、インタラクションを取れたのではないかと思います。

作文の授業では、作文を書くにあたり、どのような順番で書くと分かりやすい作文になるかを理解させるために、序論・本論・結論の文を用意し、並べ替える活動を行った後に、序論・本論・結論のそれぞれでどんなことが書けるのかアイデアを教師側から提案する他、学生自身から意見を引き出し一方的に情報を与えるという状態を作らないようにしました。本論では、「まず、次に、それから」を使うこと、どこに行ったのか・そこで何をしたのかを書くことを意識させるために、教科書の例文の他に私自身の旅行の話を使い、作文の例を複数与えることでより理解を深めるようにしました。この授業での反省点は、教師側からの指示がうまく伝わらない時が多く、活動の開始が遅れてしまうことがありました。現地の先生がチャットを使ってベトナム語で指示を出してくれたのでなんとか活動に移ることができましたが、口頭だけでは伝わりづらいので、指示のスライドを作るなど改善策が見つかりました。

文法の授業は、一番長く時間をかけて教案や教材を作った授業だったので、自分なりの挑戦としてオンラインツールを活用した活動を行いました。ドラえもん部屋のイラストを使って「～てあります」の文を作る活動では、ベトナムで一番有名なアニメはドラえもんであるという情報をもとに取り入れました。学生もすぐにドラえもん部屋であることを答えてくれて、学生の興味を少し

でも引くことができたのではないかと思います。改善点としては、導入が難しく、学生に伝わりづらかったという点と、導入から内容に入る流れが繋がっていないような授業になってしまいました。また、オンラインツールを使って、活動を展開したものの、その活動で何ができるようになるのかをもっと明確にするべきであったという点と、活動をしたここに満足してしまい、適切なフィードバックができていなかった点が挙げられます。

会話の授業は、2年生のクラスということもあり、少し難易度が高いチャレンジロールプレイを授業に取り入れました。このクラスのレベルがとても高く、また積極的に授業に参加してくれたので、4回の授業の中で一番活気がある授業を展開できたように感じました。チャレンジロールプレイをした後に、カジュアルな場面での話し方、励ます表現をインプットした後に、フォーマルな場面ではどのような言い方になるのか、違いを意識させながらインプットをしました。その後に、先生役(実習生5人)と学生役(ベトナムの学生)に分かれてフォーマルな場面のロールプレイを行いました。それぞれのグループで実習生と学生が活発な会話を行っている様子を見ることができました。その後には、実習生と学習者のペアで発表してもらい、実習生一人一人からフィードバックを話してもらうことで、私だけでなく様々な母語話者の意見を学習者に与えることができたと思います。

全体的な感想として、良かったと思う点は、4回の授業を時間を守ってほぼ教案通りに授業を行うことができたこと、積極的にオンラインツールを利用して、オンラインという環境を生かしたことに挑戦できたことだと思いました。一方で、改善点としては、もっと生徒とコミュニケーションを取ること、問題を出したときに、学生の答えを一定時間待つこと、指示をもっと明確に出すこと、オンラインツールを使うのは良いが、その活動は授業目標に対応しているのか、その活動で学生は何をできるようになるのかを意識して授業を組み立てること、フィードバックをもう少し時間をかけてやることがもう少しできたのではないかと思います。

今回の実習では、日本語を教えること自体が初めてで大変なこともありましたが、自分で1から授業を作り上げるという貴重な経験をすることができました。オンラインという形にはなってしまいましたが、オンライン機器・Zoomなども使いこなせるようになったし、オンラインで教えるためにどんな準備が必要なのかを知ることができて、とても収穫のある2週間だったと思います。